

# エディトリアル

横須賀市立うわまち病院 副管理者・小児医療センター長 宮本朋幸

COVID-19は、2020年から世界中に拡大し、現代社会での感染症の拡大は非常に早く進むものであると皆認識を新たにしたことと思う。その中で感染学者や、感染症科にスポットが当たり、感染症に対する知識と対策の重要性も改めて痛感させられた。

2020年は全く姿を消していたRSウイルス感染症は、2021年になり爆発的に増加し、その後、COVID-19も小児に拡大していった。小児科は古くから感染症との戦いであったが、近年は、さまざまな迅速診断ができるようになり、ワクチンや治療薬も出てきているので臨床の場での対処法は変わってきた。そこで今回は、主に地域で感染症臨床のエキスパートとして活躍されている先生方に執筆をお願いした。

佐藤厚夫先生には、溶連菌感染症の症状、診断、治療について解説していただいた。また、迅速診断ができるようになった現在だからこそ、慢性保菌者と感染者を区別することが必要であることをご教授いただき、また、その慢性保菌者への対応法にも言及していただいた。

橋本浩一先生には、RSウイルス感染症についてお願いした。乳幼児の地域医療を行うには避けては通れない感染症で、その症状出現のメカニズム、治療を行う際の注意点やTipsを解説していただいた。また、RSウイルス感染症に対処する医薬品の最新情報にも言及していただいた。

藤本嗣人先生には、夏風邪症候群としてアデノウイルスやエンテロウイルス感染症についてお願いした。咽頭結膜熱として発症するアデノウイルス感染症は、COVID-19拡大の中で生じた小児急性肝炎に関与していることが示唆され、対策の整備が必要であろう。

武井智昭先生にはマイコプラズマ感染症をお願いした。病原菌検出による診断が難しい本疾患に対する臨床での診断方法、治療法について解説していただいた。

高宮光先生にはインフルエンザをお願いした。高宮先生は、地域で発生するインフルエンザを毎年分析されていて、それに基づく2022~2023年の流行予想と注意すべき年齢層も指摘いただいた。

佐々木暢彦先生には感染性胃腸炎をお願いした。「昔の名前を憶えていますか？」と題して、大学から地域の病院まで幅広いフィールドで長年感染症と向き合ってきたご経験をもとに、最新知見をも解説していただいた。

岩田敏先生にはインフルエンザ菌と肺炎球菌をご担当いただいた。ワクチンが開発されるまでは、重篤な感染症を引き起こす細菌であった。そのことを解説していただき、ワクチンの重要性をも解説していただいた。

本特集が、地域で活躍される方々の小児感染症診療のお役に立てることができれば幸いである。